

被災地で学び、成長する生徒たち — 7年間の活動をふり返って

所沢西高校 倉川 博

はじめに

東日本大震災から間もない2011年7月、生徒たちからの「西高ではボランティアに行かないですか?」「自分も協力したい」などの声に背中を押されたことが、その後の活動のきっかけとなった。筆者自身も被災地で支援をしたという思いは持っていたが、まず行動しなければ始まらないという当たり前のことを生徒たちが気づかせてくれた。

被災地のボランティアセンターとのやりとりの中で、沿岸部にある福島県立いわき海星高等学校の津波被害が大きいたことがわかり、同校を訪問することが決まった。思い返せば、一本の電話で私たちを受け入れてくれた、いわき海星高校の箱崎温夫校長、澤尻京二教頭(現校長)、熊谷章二教諭との縁が交流のスタートである。そして毎年夏休みが近づくと、今年も行きましようという生徒たちから声があがり、これまでに1泊2日の活動を7回実施してきた。

震災後の2年間の活動は、本誌NO66(2013年、さいたま教育文化研究所)で報告の機会をいただいた。その中には、震災の年の春に福島県双葉郡から本校に入学した2名の生徒の文章も紹介した。また、これまでのいわき海星高校との交流については、紙面の都合で詳しくふれることは

できないが「歴史地理教育」876号(2018年、歴史教育者協議会)で報告したので、これらをお読みいただければ幸いである。

本稿では、いわき海星高校との交流をきっかけに始まった有志による活動、両校のPTA役員の交流といったすす野の広がりなどについて報告したい。

KSOV

よく洋酒の名前と間違えられるが、生徒有志が始めたグループの名前である。高校(K)最後の(S)思い出に(O)ボランティア(V)というチーム名である。

いわき海星高校での2回目の活動(2012年8月)を終え、年が明けた2013年1月下旬、嬉しい知らせが舞い込んだ。いわき海星高校野球部が第85回センバツ甲子園大会に21世紀枠で出場が決まったのである。津波が流れ込み、多数の危険物が埋まっている校庭で練習を重ね、好結果を残したことが評価されての出場であった。前年に校庭の整備を手伝った本校の生徒たちも大変喜んだ。

水産系の高校のため生徒数が少ないうえ楽器は和太鼓一つしかなく、本校には吹奏楽による応援という光栄な依頼が寄せられた。校内で検討し吹奏楽部を中心とする友情応援隊約120名を派遣し、同校の応援団とともにアルプススタンドで元気に応援



被災状況の見学（2014年）左から2人目が玉田さん

を繰り広げた。

いわき海星高校の甲子園での活躍は、震災・原発災害から立ち直ろうとする地元のみなさんへの励みになり、その力になれたことは生徒たちの自信にもつながった。しかし、現地を見ている生徒たちは、復興の道のが険しいことも理解しており、注目のイベントで終わりにせず地道に交流をづけていくことの大切さにも気づいたようだ。その年の2013年夏にも同校を訪問して校庭整備などをおこなった。

2013年秋、吹奏楽部長として活躍し
いわきサンシャインマラソン

た玉田尚子さんから卒業を前に被災地のために自主的な活動を企画したいという相談が寄せられた。そこで、津波被害に遭った沿岸部を走り抜ける「いわきサンシャインマラソン」（2014年2月）にボランティアスタッフとして参加することとしてKS OVを立ち上げたのである。

玉田さんの呼びかけにより所沢西高校のほか川越南高校、所沢高校、所沢北高校、所沢中央高校、狭山ヶ丘高校の3年生36名が集まった。目的地のいわき市江名は、いわき海星高校の地元地域にあたり、かつては漁業で賑わい、マラソンでは折り返し地点

点になっている。

たくさんの大漁旗でランナーを応援することでお知らせされており、生徒たちも大漁旗を手作りしたり、江名のみなさんに聴かせる合唱を練習したりと準備をすすめてきた。ところが、当日は関東から東北にかけて記録的な大雪となり、前夜から車中泊で向かった一行は到着

直前に大会の中止を知らされた。しかし、江名のみなさんが津波被害による仮設の公民館で暖かく迎えてくれ、地震・津波のようすや復旧の苦労話をじっくり聴くことができた。これがその後の活動の継続につながった。

2015年からは、卒業後1年目のOBと進路が決まっている3年生が中心となって企画・運営をしてきたが、年によっては他の高校や大学の友人などの参加もあり、参加者のすそ野が広がってきた。いわきサンシャインマラソンは、約1万人がエントリーする、愛好家の中でも人気の大会である。KS OVチームは、大会実行委員会に「サポートメンバー」として登録し、ランナーや応援で賑わう折り返し地点で音楽や声援で大会を盛り上げてきた。同時に、江名区役員の方々とともに設営や撤収作業などの力仕事を担ってきた。一緒に作業をしながら交わす会話から参加者はいろいろなことを感じ、学んだようだ。

企画にあたっては、現地を見て地元の方の生の声に耳を傾けるということを必ず盛り込んだ。例えば、江名区の津波被害に関するフィールドワーク、いわき海星高校の見学、津波被害に遭った江戸時代の古民家「清航館」の見学と修復に取り組む建築家の講話、塩屋崎灯台に上って津波の浸水域を実感するとともに住宅の高台移転のための



いわきサンシャインマラソンの設営 (2017年)



ランナーを元気よく応援 (2017年)

大規模造成工事の遠望、震災時に通信が途絶する中で大きな役割を果たした福島県漁業無線局(小名浜)の見学などである。

2018年も準備が始まったが、今回は原発事故により避難を余儀なくされている双葉町の皆さんが住む仮設住宅(いわき市南台)の訪問や講話を予定している。

これまでに学校として実施してきた活動と有志の活動などを合わせると、700名以上が参加したことになる。参加者の感想を紹介しよう。

◆(被災地のことを)多くの方々、特に若い世代の人々に知ってもらいたいと思いま

す。自分自身が「人」を助けられる「人」になることが大切だと思います。そういう人が増えたらと思います。マラソンのボランティアは、大雪で中止になってしまいました。話をしてくださった方々それぞれが、私たちの訪問、大漁旗、そして歌により感謝、また笑顔を見せてくださり、本当の意味での「ボランティア」ができたのではないかと思います。震災直後から復興支援をしたいと思っていました。3年かかってしまいました。こういった形で自分の耳、目、そして肌で直接触れることができ、本当に大きな経験、また自分自身の未来への新たな一歩

◆震災でとても大きな被害を受けたのは、家とか建物だけでなく、そこに暮らす人々の生活、心だっと思っています。それでも支え合って協力して生活している江名の人々のつながりが、心が打たれました。区長さ

◆(被災直後の悲惨な江名の様子のお話を聞いて衝撃をうけました。そんな中から現在のように進んできたことは本当にすごいと思っ、江名のみなさんの強さを感じました。みなさんに聞いたことを家族や友達に広めて、実際の状況を多くの人に伝えようと思いました。(2016年参加の高校生)

◆震災直後の悲慘な江名の様子のお話を聞いて衝撃をうけました。そんな中から現在のように進んできたことは本当にすごいと思っ、江名のみなさんの強さを感じました。みなさんに聞いたことを家族や友達に広めて、実際の状況を多くの人に伝えようと思いました。(2016年参加の高校生)

◆震災直後の悲慘な江名の様子のお話を聞いて衝撃をうけました。そんな中から現在のように進んできたことは本当にすごいと思っ、江名のみなさんの強さを感じました。みなさんに聞いたことを家族や友達に広めて、実際の状況を多くの人に伝えようと思いました。(2016年参加の高校生)

◆高校生の時に参加しなかったことが悔やまれました。福島を訪れるのは初めてのことでした。ニュースや新聞等で様々な情報は入ってきましたが、現地で宿舍の支配人の方、熊谷先生、江名のみなさんからお聞きしたこと、見るものはほとんど初めて知ることばかりでした。メディアはもちろん1つの情報ではあるけれど、一部、一面でしかないことを改めて知らされました。福島に限らず、気になるもの、こと、ところ



所沢西高文化祭での物産販売 (2015年)

広がる交流のすそ野

へはほとんどん飛び込んでみようと思いましたが。(2016年参加の大学生)

活動が実施できたのは、当初から教職員やPTA関係者に理解していただいたことが大きい。生徒たちの活動ぶりから、いわき海星高校への保護者の関心も高く、2014年11月には本校のPTA・後援会役員が、いわき海星高校の文化祭「海星祭」を訪問して保護者同士の交流を深めた。2015年の本校の文化祭「西華祭」には、いわき海星高校PTA関係者が来校し、特

産の梨や海産物の即売会などをおこない盛況であった。その後、双方の文化祭を訪問するなど交流が続いている。震災当時は学校

間の交流であったものが、いわき海星高校の地元地域に広がり、参加者層にも幅が出てきた。微力ながらも、役に立ちたいという純粋な若者の思いを届けられたと思っっている。その一方で、むしろ私たちが学び成長させていただいたことの方がはるかに大きい。

活動の初期に参加し2018年春、社会人となる二人にメールで取材し、当時から返つてもらった。

飛田和藍さん(2011、2012年にボランティアに参加、埼玉県の中学校に採用内定)

損壊した校舎を見た時には心が痛みましたが、特に印象に残ったのは、仮設住宅で暮らす子どもたちのことでした。また来てね、と手作りのワンちゃんの人形をくれました。今も大事に取っています。教師になるにあたって生きていると思うことは、生徒の命や安全を守らなければいけないという使命感が芽生えたことです。勉強を教えることより、何より生徒の命を守ることが教師の仕事なんだということは、被災地ボランティアに行ったからこそ心から理解できていく気がします。

青木彩由美さん(2013年に参加、KS OVの事務局としても活躍、被災地を見たことがきっかけで大学で建築学を学び、ハウスメーカーに就職内定。古民家「清航館」

がある中之作地域の街づくりを卒業研究

高校時代のボランティア経験は、ざっくりいうと人生変わるくらいです(笑)あの時のあの経験があったからこそ縁というものとても大切にするようになったと思います。人見知りではあるものの、その土地、そこに住む人の大切さや良さを知らずとずるきっかけになり、大学での学びもあって、旅行先ではほとんどん話しかけるようになりました。今は卒業制作期間中ですが、時々あの時のことを思い出し自分の目的を忘れずに頑張る原動力にもなっています。

おわりに

東日本震災から7年が過ぎようとしているが、江名のみなさんはあえぎながら、試行錯誤しながら震災・原発災害から立ち直ろうとしているように見える。その姿に接した生徒たちは「オリンピック・パラリンピックを見据えた福島復興の加速」「心の復興」といった威勢の良い言葉では片付けられないことに気づいたと思う。上記の二人の卒業生は、現地を見て聞いて学んだことを自分の生き方に活かして、嬉しい限りである。正義感あふれる青年期にこういう経験をした、のべ700名の人たちの人生の中で何らかの形で活かされていくことを願っている。